ま　え　が　き

韓国と台湾は1970年代初めから発展途上国の経済成長の一つの典型として，ことに開発経済学から注目されてきた。そこではアジアNICsと言われた時代から，NIEsと呼ばれ，あるいはアジアの4つの小龍と呼ばれる現在まで，多くの場合，この両国（正確には1国と1地域，以下両国）はまるで双子のように論じられてきたのである。本書の序章でも述べられているように，確かに両国の経済成長の軌跡には類似した点が少なくない。世界銀行の『東アジアの奇跡』においても高成長国という同一のカテゴリーで論じられている。

しかし，本当にそうなのだろうか。マクロ的にみて成長の結果は「似たようなもの」であったとしても，その過程，いわば「発展のメカニズム」と私たちが呼ぼうとしているものまでをも「似たようなもの」と見なすことができるのだろうか，というのが韓国や台湾を研究してきた地域研究者の偽らざる感想であった。本書をつくる契機はこのような地域研究者の素朴な感想から始まった。ことに3年間の台湾での研究から戻ったばかりの編者の一人である佐藤幸人の強い問題意識が，アジア経済研究所での研究会を組織することに大きな力を発揮した。

両国の発展メカニズムを比較しようとする際，どのような視角からこのテーマに接近するのかは，この研究会が成功するか否かに対して決定的な重要性をもつように私たちには感じられた。両国の経済発展に関しては開発経済学の膨大な蓄積がすでに存在している。また同じディシプリンからの両国比較も相当な量に達している。それらの先行研究と同様の視角からの接近は，私たちの「両国の発展メカニズムは異なっているのではないか」とする問題意識をクリアカットに明らかにするものとは考えられなかったし地域研究者の蓄積を生かすものとも考えられなかった。また，発展の過程を「メカニズム」として明らかにするためには，私たちの目をよりミクロなところに据え

る必要があった。そこで，この問題に接近するために，経済の分野のみならず，政治，社会といったより広い視野から，そして経済分野においてもマクロなパフォーマンスという面よりは政府と企業との関係，産業構造の変化や，個別産業の展開，といったミクロな面に注目することにした。

以上のような方針のもとで，韓国と台湾を研究する各分野の地域研究者の方々に参加をお願いし，そのご快諾をえて「韓国，台湾の発展メカニズムの再検討」研究会がアジア経済研究所に組織され，1993，94年度の2年間にわたって研究会が実施された。本書は上記研究会の成果である。毎回の研究会では議論を重視し，韓国，台湾という異なった地域を専門とする研究者がお互いの知見を共有するように努めたが，地域の専門家であればあるだけ，知見の共有には困難もまたあった。しかし，各参加者の熱心なご協力，現地調査をはじめさまざまな機会に貴重なご意見を賜った韓国，台湾の方々，お名前は記さないが，ヒアリングなどでご協力を頂いた外部の先輩研究者各位，また，アジア経済研究所やアジア経済出版会の皆様のご協力で，このような形で本書を上梓できたことは大変に有り難く，厚くお礼を申し上げたい。

ともあれ，本書は韓国と台湾の発展メカニズムに関する地域研究の側からのひとつの回答である。未熟な点，論じ足りない点が多々あることは承知のうえで，一応の結論として上梓した。広くご専門の方々のご叱正をお願いしたい。

1996年3月

編　　者